しあわせクラブ

森野　水琴

満月の夜、男が道を歩いていると、雪のように白い肌の女性に出会った。
女はしあわせクラブの月例会の案内を男に手渡す。満月の夜に集まる会合らしい。女に見とれながら、いざなわれるがままに月例会の会場に着いた。
今夜のように月見にふさわしい夜は、屋外に卓を並べて、満月を愛でるのが定例らしい。
すでに何人も参加者がいて、女の案内する卓に二人で座った。
満月と女を見比べながら、女が月からの使者のようだと男には見えてきた。
何を話すわけでもないのに、幸せな気分になる。
満月のたびに女と逢える喜びに、男は微笑みながら、しあわせクラブに入会した。
しあわせな日々が始まる。

次の満月の夜は、あいにくの雨であった。
しあわせクラブの月例会は雨天中止である。あきらめられない男は先月の月例会が行われた会場に来てしまった。
雨天中止だけあって、来場者は男だけであった。先月案内してくれた雪のように白い肌の女性は不在で、地味な感じの女性が出迎えてくれた。
ますます雨脚が速くなる。女に勧められるがまま男は雨宿りしている。金曜日の夜なので翌日の出勤を心配しなくてもよいのが嬉しい。
そのまま雨宿りして、男が家路についたのは日曜の午後だった。